



Title	アリストテレス『トピカ』A巻における弁証術研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	北郷, 彩
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第12379号
Issue Date	2016-09-26
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/63421
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Aya_Kitago_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 北 郷 彩

学位論文題名

アリストテレス『トピカ』A巻における弁証術研究

第一章で氏はまずA巻1章の分析を介し、推論の四種類（論証、弁証術的推論、見かけ上の推論、誤謬推論）を提示しその差異を明示しつつ、共有見解（エンドクサ）に基づく弁証術的推論を構成するものの探求に従事する。言論の技術の構築においては論理的な整合性に基づく推論の基礎のもと、用いるべき諸命題の種類やその扱い方の理解が分析的な手法のもとに提示される。弁証術の理論的な部分、すなわち議論の構成要素として形式言論構築術的（*logikos*）諸概念であるプレディカビリア（述語づけ可能なもの）や述定（*katēgoria*）の類（範疇）を析出するさいに、アリストテレスの関心は、弁証術すなわち適切に為される対話的議論の厳密な仕組みを解明することである。この方法論構築の次元は弁証術的实践が遂行されるドクサ（見解）の次元とは判別される。

氏は、アリストテレスの弁証術の構築における重要な洞察を二点指摘する（1、5節）。一つには、彼がこの仕事の研究対象を「共有見解に基づく推論」と定めたことが、それまでに網羅的な仕方では体系化されなかった議論領域とその技術を新しく境界づけるという意義を持っていたとする。「真かつ第一のもの」に基づく論証と弁証術的推論は、確かに前提命題の特徴づけにおいて重要な対照を為すが、双方の相違に関して氏は推論において命題を扱う様式の違いを強調する。氏は同じ表現を与えられる命題内容が、論証においては必然的に真であるにしても、弁証術的推論においてはその様相を一旦保留して、対人論法における対話者の同意に基づいて措定する共有見解として扱うことができ、このことが譲歩に基づく共有見解の領域で賛成と反対の推論提示により吟味することを可能にしたと指摘する。

第二章でアリストテレスによるもう一つの洞察が議論される。彼は命題の検証吟味を適切に遂行する手順を確立するさいに、プレディカビリアという述語部分の構成要素の特定により、用いられうるあらゆる命題の形式上の成立要件を知ることがめざしたことが指摘される（6節）。諸命題、諸問題の下位構成部分としての四種のプレディカビリアが特定されたとき、それは、議論において展開される主題の最小単位とすることができる。四種はいずれも、命題において挙げられている事物について、何ごとかが述べ立てられる形式であり、もし命題の形式を弁証術の想定する標準形に変換するならば、理論上、あらゆる命題の構成要素をそれによって分類できる。

その四種は定義形成句（本質を意味表示する）、固有性、類、付帯性であるが、アリストテレスの構想においては、これらはいずれも「Xは何であるか」の問いが問われた際に、これに対する可能な応答となるものであり、いずれも「定義的」と呼ばれた（7節）。事物の本質（「Xであることは何であったか」）がその問いに対する成功した理想的な応答として「定義形成句」により指示されるものとして形式的な位置を占める。このソクラテスが求めていた「Xは何であるか」に対する最も厳密な応答となる概念の導入により、事物の本質を意味表示することについてより明確な説明を与えることができた。四種がいずれも事物の何らかの一性を表すことにより、四種によって同性を分析することが可能であること、またこれに伴って、同性言明を四種のプレディカビリアに分類することが可能となった（8節）。かくして「何であるか」の問いを追放し、代わりに網羅的かつ相互に排他的な可能な応答を提示することにより、「然り」「否」のみによる応答が可能な問いの構築が遂行される。定義形成句は、事物に固有であること、そして事物の「何であるか」において述語となることという二つの条件の組み合わせにより特徴づけられ、また他方、固有性、類、付帯性の三種は、これら二つの条件を同時には満たさないものとして、定義を吟味するトポスとして有効な機能を担うに至った（7、9節）。

プレディカビリアが議論の最小単位として初めに特定され、これらに基づき述定の類が導入されるに至る（10節）。「これら[四つ]に基づくあらゆる命題は何であるか或いはどれほどか或いはどのようなか或いはそれ以外の述定の何ものかを意味表示する」。すなわち四つのプレディカビリアは主語に対する述

べ立てを介して意味表示の機能を持つ。これら述定の類として導入された十種（「何であるか」「いかにあるか」等）に基づき、さらにその述定の言語的振る舞いから存在者の類（「実体」「性質」等）が導出される。存在者の類（範疇）の第一位に挙げられる実体語は、他の九種と異なり、「何であるか」の問いに対応する応答として「自らについて」の述定を形成することだけができる。例えば実体語「ソクラテス」について「ソクラテスは人間である」さらに「・・・動物である」という「何であるか」の述定の連鎖が形成される。それに対し、他の九種は、例えば性質語「白」を挙げれば、「白は色である」という「自らについて」の述定を形成するがそれに限定されず、「他のものについて」つまり実体語について例えば「人間は白い」という述定を形成することもある(10 節)。それに比し、実体語は他のものについて述語づけられることはない。例えば「白は人間である」という述定において「人間」は「白」の「何であるか」も「いかにあるか」も他の述定の類のいかなるものをも意味表示せず、有意な言明を形成しない。これらは、実体と属性の存在論的身分差を生む点として、存在論の文脈において重要な基礎づけとなる。述定「ソクラテスは人間である」において「人間」が主語の「何であるか」を意味表示し、世界においてある実体ソクラテスを意味表示（指示）する。かくして、網羅的かつ相互に排他的なプレディカビリアと述定の類の導出が、議論一般の構成要素として挙げられることを特定することにより、これらに基づく議論の分析が可能となる。検証吟味による命題の確立と覆しは、この分析的な視点により、遂行される。

氏は第三章において推論の手立てを見出す四つの道具（命題を容認すること、多義性を分割すること、種差を発見すること、類似性を調査すること）を吟味する（12 節）。これらの獲得を通じて、自らの主張を導くための推論を作る際に誤りを少なくし、これらをじかに論じる推論を作ることへと至る。命題の容認は、共有見解の命題の諸特徴を知ることによって、容認すべき内容の諸命題を見つけるために、書かれた議論を用いたり、人々の見解をよく理解したりする方法が用いられる。また語が多義的に用いられているか否かを検討するために、「いかに語るべきか」という視点から十七の論点が提示される。種差の発見と類似性の探索は、二つの事物間で何が互いに異なるかそして何が互いに類似であるかを検討することにより進められるが、これらの観点は、事物の定義を与える試みにおいて、特に同と異の議論、或いは類や種差の発見に多くの貢献をするであろう。

氏はアリストテレスが弁証術の基礎部分を以上のように構築した際、明確な目的意識を持っていたことに留意する。氏は『トピカ』A 巻の弁証術の方法の構築に基づき、B 巻以降においてそれぞれのプレディカビリアについて具体的な検証吟味のトポスが三百以上提示されるが、方法論の理解を通じてその道筋を明らかにしたとすることができる。